日本霊異記上巻第五縁小考

——比蘇寺縁起との交渉——

守屋俊彦

一

日本霊異記上巻第五縁は、一一六の話の中では、もっとも長篇に属するものの一つであるとともに、内容的にも多くの問題を含んでいる。例えば、この話の主人公である大部屋栖野古の扱い方が、日本霊異記の撰者景戒の出自を推測するための一つの手掛りを提供しているがごときである。(1)

しかし、ここでは、そうした問題はしばらく措いて、この話の中の一つの小話を取り上げ、それと比蘇寺縁起との交渉の径路を辿りながら、もしできるなら、その面からそうした問題にもふれてみることにしたい。

この話は次の三つの小話から成っている。

(イ)大部屋栖野古が仏像を造ることを進言し、排仏運動を拒否したこと。

(ロ)彼が聖徳太子の補佐役となり活躍したこと。

(ハ)彼が黄泉国で聖徳太子に会ったこと。

そして、最後に長い賛が付いている。[2] なお、この(イ)の前に、「本記を案ふるに曰はく、」という文があって、(イ)、(ロ)、(ハ)、三つの小話を合わせたものが、ある家の伝承であったことを示している。そして、そのある家というのは、そのまたすぐ前に「大花位大部屋栖野古の連の公は、紀伊の国名草の郡の宇治の大伴連等が先祖なり。」とあるのによって明らかなように、紀伊国の大伴氏のことなのである。つまり、この話はもともと紀伊国の大伴氏の家伝であったとみられるのである。[3]

その家伝を構成している、(イ)、(ロ)、(ハ)、三つの小話の中、(イ)にもっとも問題があるように思われるので、ここでは(イ)を取り上げてみたい。(イ)の小話は、

敏達天皇の代、和泉の国の海中に楽器の音声あり、笛箏琴笙篠等の声の如く、或るは雷の振動するが如し。昼は鳴り、夜は輝き、東を指して流る。大部屋栖古の連の公聞きて奏す。天皇嘿然りて信けたまはず。更に皇后に奏すに聞きて、連の公に詔りたまはく「汝往きて看よ」とのたまふ。詔を奉りて往き看るに、実に聞きしが如く、霹靂に当りて楠あり。還り上りて奏さく「高脚の浜に詔りつ。今屋栖、伏して願はくは仏像を造るべし」とまをす。皇后詔りたまはく「願ふ所に依るべし」とのたまふ。連の公、詔を奉りて大く喜び、鳴の大臣に告げて詔命を伝ふ。大臣もまた喜び、池辺直氷田を請けて仏を雕り、菩薩三軀の像を造り、豊浦の堂に居きて、諸人仰敬す。然るに物部弓削守屋の大連の公、皇后に奏して曰はく「およそ仏の像は国内に置くべからず。なほ遠く退けむ」といふ。皇后聞きて屋栖古の連の公に詔りたまはく「疾くこの仏の像を隠せ」とのたまふ。連の公、詔を奉り、氷田の直をして稲の中に蔵さしむ。弓削の大連の公、火を放ちて道場を焼き、仏の像を将ちて難破の堀江に流す。屋栖古に徴りて言はく「今国家災を起すは隣国の客神の像を己が国内に置くに依る。この客神の像を出すべし。

速忽に豊国に棄て流さむ」といふ。客神は仏の神後なり。固辞びて出さず。弓削の大連、狂れたる心に逆を起し、傾けむことを謀り、便を窺ふ。ここに天また嫉み、地また憤み、用明天皇の世に当りて弓削の大連を挫きつ。仏の像を出して後の世に伝ふ。今吉野の比蘇寺に安置きて光を放つ阿彌陀の像これなり。

というような話である。一番終りが、「今吉野の比蘇寺に安置きて光を放つ阿彌陀の像これなり。」という句で結ばれているところからすれば、家伝ではあるが、比蘇寺縁起の形態にもなっているとみられるのである。

その比蘇寺縁起は欽明紀十四年五月の条に載っている。(4)

夏五月、戊辰の朔の日、河内の国言さく、「泉の郡の茅渟の海の中に梵音あり、震響雷の声の若く、光彩晃り曜くこと日の色の如し」とまをしき。天皇、心に異みたまひて、溝辺直ここにただ直と曰ひて名字を書さず。蓋し伝へ写して誤り失へるなり。をして海に入りて求訪めしめたまひき。この月、溝辺直、海に入りて果して樟の木の海に浮きて玲瓏くを見、遂に取りて献りしかば、天皇画工に命せて仏の像二軀を造らしめたまひき。今吉野寺に光を放てる樟の像なり。

寺名が吉野寺となってはいるが、後に述べるように、比蘇寺の別名なのである。(5)

そこで、この両者を一応比較してみると、欽明紀の方は、この寺の仏像の由来のみを語っているのにたいして、日本霊異記のは、その後に仏教伝来当初における崇仏、排仏の争いのことが付け加えられていて、量として三倍近い長いものになっている。この仏教受容をめぐっての争いの部分は、欽明紀十三年十月の条、崇峻即位前紀七月の条を要約したものであるが、これらの書紀の記事には勿論のこと、先の欽明紀十四年五月の条にも、大部屋栖野古という人物は全く姿をみせていないのである。ところが、日本霊異記の話では、その屋栖野古が一貫して主役を演じているのである。そこには、屋栖野古を強く押しだそうとする意図があらわに見られるのである。このことからも、上五の話

が紀伊国の大伴氏の手によって作られたものであることがいえるのである。

恐らくは、紀伊国の大伴氏の者が、欽明紀十四年の比蘇寺縁起を軸にし、欽明紀十三年、崇峻即位前紀の記事などを適当に要約したものを付加してこの小話を作り、主役を屋栖野古にして家伝にしたのであろう。それにしても、なぜ一番終りに、「今吉野の比蘇寺に安置きて光を放つ阿彌陀の像これなり。」という句が残っているのであろうか。これでは内容は家伝であっても、形態は依然として比蘇寺の縁起譚ということになるだろう。家伝にするのならば、この句は除いた方がすっきりする。この句を残さなければならない何等かの理由があったのであろうか。一つの問題として提起してみたい。

二

さて、この小話の前半、つまり、比蘇寺縁起にあたる部分の中心にあるのは、いうまでもなく、海上を流れていたという楠である。その楠については、次の三つのことが語られている。

(1)音楽が聞こえた。

(2)雷鳴がした。

(3)光り輝いていた。

この小話の原話になっている欽明紀十四年の条の話でも、この三つのことが語られているのだが、ただ(1)については「梵音あり」とあって仏教的なものになっている。

そこで、この三つの中、まず(2)を取り上げてみたい。楠と雷との関係である。一体、固有信仰では、雷は神であっ

た。そして神としての雷が宿るのは大木であった。恐らくは大木にしばしば落雷するところから、そのように考えられたのであろう。推古紀二十六年の条をみると、

この年、河辺臣名を明く。を安芸の国に遣して舶を造らしめき。山に至りて舶の木を覓ぎしに、すなはち好き材を得て名して伐らむとしき。時に人ありて曰はく「霹靂の木なり。な伐りそ」といひき。河辺臣曰はく「それ雷の神なりとも、あに皇命に逆はめや」といひて、多に幣帛を祭りて、人夫をして伐らしむるに、大雨ふりて、雷なり電しき。ここに河辺臣剣を案りて曰はく、「雷の神、人夫をな犯しそ。当にわが身を傷れ」といひて仰ぎて待つ。十余霹靂すれども、河辺臣を犯すことを得ず。すなはち少き魚と化りて、樹の枝に挾れり。すなはち魚を取りて焚き、遂にその舶を修理りき。

とある。「霹靂の木なり。」とあって、雷が木に宿っていたことがわかる。ただし、その木がどういう種類の木であったかということははっきりしない。しかし、それで舟を造っているのだから、大木であったとみるべきであろう。

ところで、播磨国風土記逸文に、

明石の駅家、駒手の御井は、難波の高津宮の天皇の御世、楠、井口に生ひ、朝日には淡路島を蔭し、夕日には大倭島根を蔭しき。仍りてその楠を伐りて舟を造りしに、その迅きこと飛ぶが如く、一瞰に七浪を去き越えき。仍りて速鳥と号く。ここに、朝夕にこの舟に乗りて、御食供へまつらむ為に、この井の水を汲みき。一旦、御食の時に堪へざりき。故、歌を作りて止みき。唱に曰はく

住吉の　大倉向きて
飛ばばこそ　速鳥と云はめ
何の速鳥

という話がある。この話には、宇宙樹や聖泉の信仰がみられて興味深いのだが、[6] それはともかくとして、ここでとくに注意してみたいのは、楠で舟を造り、しかも、それが足の速い快速船であったということである。古代では楠で舟を造っていたらしい。そのことはすでに神話にも投影しているのであって、素戔嗚の尊が眉の毛を抜き散らしたら櫲樟になり、その櫲樟で浮宝、つまり、舟を造ったとあるし（紀宝剣出現章五ノ一書）、諾冉二神は蛭児を天の磐櫲樟舟に乗せて流したともある（紀四神出生章本文）。楠は大木になり、材質が堅いところから舟材として適していたのであろう。

すれば、あの推古紀の舟を造ったという木も楠だったとみるべきであろう。そして、それを「霹靂の木なり」としているのだから、楠はまさに雷神の宿る木だったのである。聖木だったのである。このことは、ほかならぬ日本霊異記の中にもみられるのであって、上三をみると、空から墜落した雷は、農夫に命乞いをし、その後、

雷答へて言はく「汝に寄せて子を胎ましめて報いむ。我が為に楠の船を作り、水を入れ、竹の葉を泛べて賜へ」といふ。すなはち雷の言ふが如く作り備へて与へつ。時に雷「近く寄ることなかれ」と言ひて遠く避らしめ、すなはち嗳り霧りて天に登る。

とある。雷が昇天するにあたって、楠で作った水槽を求めたというところには、雷神と楠とが深い関係にあったことをよく示しているといえる。恐らくは、楠が大木であるために、しばしば落雷するところから、このような固有信仰が生まれてきたのであろう。

このようにみてくると、「或るは雷の振動するが如し。」というのも、単なる比喩ではなく雷鳴そのものであったとみるべきであろう。楠に宿っていた雷神が鳴り轟いていたということなのである。つまり、(2)のすぐ下には、こうした雷にたいする固有信仰があったということになるのである。

三

そこで、この(2)を軸にして、同じような視点から、さらに(1)と(3)について考えてみたい。まず、(1)であるが、ここで奏されている楽器にはきわめて特徴的な点がみられるのである。四種の楽器があるが、その中の三種までが琴だということである。箏は十三絃の琴、琴は七絃の琴、箜篌はくだら琴である（大系本頭注）。妙に琴にこだわっているところがある。

いうまでもなく、琴は、古代では、単なる楽器ではなく、神降しのための聖具であった。仲哀天皇は、熊曽征討にあたって、自ら琴を弾いて、神意を乞うていられる（仲哀記）。今日でも巫女が琴を弾きながら占をする琴占が行われたりしている。(7)

その琴は楠で作られていたらしい。仁徳記に次のような記事がある。

この御世に、免寸河の西に一つの高樹ありき。その樹の影、旦日に当たれば、淡道島に逮び、夕日に当れば、高安山を越えき。故、この樹を切りて船を作りしに、甚捷く行く船なりき。時にその船を号けて枯野と謂ひき。故、この船をもちて旦夕淡道島の寒泉を酌みて、大御水献りき。この船、破れ壊れて塩を焼き、その焼け遺りし木を取りて琴に作りしに、その音七里に響みき。

この話は先にあげた播磨国風土記逸文のそれと同類のものであるが、琴のことが後に付いているために、少し複雑になっている。ところで、この話では、大木を「一つの高樹」としていて、どういう種類の木であったかは記されていないが、逸文の話からすれば、楠とみて置いてもよいだろう。すれば、楠で琴を作ったということになろう。しかも、

その琴は、「その音七里に響」む程の素晴らしい琴であったという。それにしても、その音が七里にまでひびいたというところに、琴のもつ神秘性をうかがうこともできるのである。

なお、楠と琴との関係を語るものとしては肥前国風土記神埼郡の条に、

琴木の岡（高さ二丈、周り五十丈、郡の南にあり。）

この地は平原にして元来岡なかりき。大足彦の天皇、勅り給ひしく、「この地の形、必ず岡あるべし」と宣り給ひて、やがて郡下に令して、この岡を起し造らしめ給ひき。造り畢へし時、岡に登りて宴賞し給ひ、興闌ぎたる後、その御琴を堅て給ひしに、琴、樟と化爲りき。（高さ五丈、周り三尺あり。）因りて琴木の岡といふ。

というような話がある。琴を立てたら楠になったというのは、これを逆にしてみれば、琴が楠で作られていたことをそれとなく示しているともいえよう。(8)

楠が雷神の宿る木であり、琴が神降しの聖具であるとすれば、この両者が深い関係にあることは当然なことといえる。両者は神を媒介にして結び付いていたのである。しかも、その楠で琴が作られている。すれば、楠の流れているあたりから、琴の音が聞こえたというのも、固有信仰の世界では、幻想ではなく、現実のことだったのである。「笛箏琴笠篌の声の如く、」という表現もまた比喩などではなかったのである。

次に(3)であるが、楠の流れているあたりが光り輝いていたというのも、楠が雷神の宿る木であってみれば、素直に肯けるのである。楠に宿っていた雷神が光っているのである。一体、古代の文献には、海上で光る神がしばしば姿を現わしている。大国主神が、一緒に国作りしていた少名毘古那神が突然に常世国に去ったので心配していると、

この時に海を光して依る来る神ありき。その神言りたまひしく、「よく我が前を治めば、吾能く共与に相作り成さむ。若し然らずは国成り難けむ。」とのりたまひき。ここに大国主神曰ししく、「然らば治め奉る状は奈何に

ぞ。」とまをしたまへば、「吾をば倭の青垣の東の山の上に拝き奉れ。」と答へ言りたまひき。こは御諸山の上に坐す神なり。

と、古事記にある。「御諸山の上に坐す神」とは、三輪山の大物主神のことである。この神は、いうまでもなく、蛇神である。蛇神といえば、蛇体であった肥長比売は、一夜を契った本牟智和気命が逃げた時、「ここにその肥長比売患ひて、海原を光らして船より追ひ来たりき。」(垂仁記)とある。このように、ほかならぬ蛇が海上を照らしてくるというところから、その実体は海蛇、それもセグロウミヘビであろうともいわれている。[9] しかし、固有信仰では、蛇神が同時に雷神であったところからすれば(雄略紀七年七月の条、常陸国風土記逸文をみると、国譲りした伊勢津彦は天の日別の命にたいして、「吾は今夜、八風を起して海の水を吹き、波浪に乗りて東に入らむ。これすなはち、吾が却る由なり」といい、

天の日別の命、兵を整へて窺ひしに、中夜に及る比、大風四に起りて波瀾を扇挙げ、日の如光り輝きて陸国も海も共に朗に、遂に波に乗りて東にさりき。

とある。この神も海上を照らしている。そして、この神は雷神であったとされている。[10] 何れも雷が海上で光り輝き、それがとくに夜には神秘的にみえるところから発想されたものであろう。そうしたことと、楠に雷神が宿るということが一つになって、ここの「夜は輝き、」というような表現になったのであろう。

四

このようにみてくると、この小話の下に、楠と雷神をめぐる固有信仰があったことが解るのである。その楠で造っ

た仏像が「光を放」ち、それが比蘇寺の本尊になっているという。仏像は仏の現身の姿である。尊いものである。とりわけ光る仏像はとくに尊ばれたらしい。日本霊異記には、光る仏像のことが幾つかでている。中三十九をみると、大井河の砂の中に埋もれていて掘りだされた薬師仏の木像について、

知識を引き率、仏師を勧請して、仏の耳を造らしめ、鵜田の里に堂を造りて、尊像を居きて供養す。今号けて鵜田堂と曰ふ。この仏像、験ありて光を放ち、願ふ所能く与ふるが故に道俗帰敬す。

と記してある。また、中三十六では、奈良の下毛野寺の観音の木像も、「光を放てり。」とある。そして、仏像が光るという不思議なことにかかわるものとして、前者では、砂に埋もれていた仏像が、「我を取れ、我を取れ」といったとか、後者では落ちた仏像の首が、「自然に故の如く継」いだとかいうようなことがまことしやかに述べられている。

そのまことしやな部分に当るのが、この小話では、海上を東に流れる楠なのである。しかし、楠が雷神の宿るものであってみれば、それを素材にして造った仏像が光っていたのは当然なことであって、その謎はよく透いてみえるのである。そして、この小話では、この流れる楠のまわりに、楽器の音が聞こえたとか、昼は鳴っていたとか、夜は輝いていたとか、というようなことがさらに仰々しく並べたてられているのだが、これもまたすべて雷神の線からでていることであった。つまり、仏像を造るという、もっとも仏教的な世界のすぐ下に、実は、雷神信仰という固有の信仰が密着していたということなのである。

それにしても、その楠が海上を流れていたようになっているのはどういうことなのであろうか。楠が雷神の宿る木とされたのは、宇宙樹ともいわれるように、それが空高く聳えているところからきているとみられるのである。空に近いので、その空にいる雷神には宿り易かったということなのであろう。その空との関係からすれば、それは山か原に立っているのが普通であろう。だから、それが流れるというのであれば、川を流れるべきであろう。それをわざわ

ざ海上を流れるようになっているところには、もう少し異なった信仰が融合しているのではないかという気がするのである。

一体、固有信仰では、神の来臨する道はいろいろとあったらしい。空から山上や樹上に降下するのが一般的なものではあるが、海辺の人々は、神は海の彼方から波に乗って海岸に寄り着くというように考えていたらしい。さらには、その波の上を流れ岸にうち寄せるもの、たとえば、海藻のようなものにくっついて寄り着くようにも思っていたようである。漂着神の信仰なのである。

先にあげた仁徳記の枯野の話には、その後に、

枯野を　塩に焼き　其が余り　琴に作り　かき弾くや　由良の門の　門中の海石に　触れ立つ　浸漬の木の　さやさや（七四）

というような歌が付いている。この歌では、琴のさやかな音を波にゆらゆらと揺れる海藻によって比喩しているところが面白いのだが、ただ琴と海藻との結び付きが予想外であって、やや理解しにくいところがある。これについて山路平四郎氏が、

「ゆらの門」は船人も容易に近づかぬ難所で、その「いくりに振れ立つなづの木」は人間の手に触れ難い清浄無垢のものとしてであって、あるいは想像上の所産による海藻であったかも知れない。しかしながら、そうであればこそ、潮に振れるその音色は「さやさや」と鳴り響くのであって、『古事記』の編者が、これを、「御琴を給はりて」のあとに配列したのは、おそらく歌謡の真髄を得たものであったろう。[11]

と述べていられるのは示唆的である。そこで、この「人間の手に触れ難い清浄無垢のもの」というのを、神のくっついているもの、というふうに今一歩進めてみたら、琴と海藻との結び付きは、もう少しはっきりしてくるのではない

だろうか。恐らくは、この地方の人々は由良海峡の潮騒の中に神の声を聞いたのであろう。その神を媒介にして、琴と海藻とが結び付き、共鳴しているのであろう。本来は神事歌謡だったのであろう。

ここで参考になるのは、和布刈神事である。下関市の住吉神社、北九州市の和布刈神社、島根県簸川郡大社町熊野神社などで行われる神事であるが、和布刈神社のがもっとも有名である。それは旧大晦日の夜半干潮時に、三人の神官が鍬を持って海中に入り、刈り取った和布を神前に供えるというものである。[12] 現在では年頭に和布を海神に供えるという意味から行われているのであるが、それが夜半という、聖なる時間に行われているところからすれば、本来は和布にくっついている神を迎える神事だったのではないだろうか。住吉神社の神事が一切の灯を消した暗闇の中で和布を刈り取っているのは、このことを暗示しているといえるのである。

七四の歌やこの和布刈神事の場合は岩礁に生えた海藻のことであるが、その海藻が海上を流れるということと、神が海上を漂着するということを結び付けてみれば、神は海上を流れる海藻にくっついて、海の彼方から海岸に寄り着いたということも考えられてよいのではないだろうか。

ところで、この小話では、楠は大阪湾を、「東を指して流れ」ていたとある。大阪湾を東流すれば、当然和泉国の海岸に到着する筈である。現に「高脚の浜に詣りつ。」と浜寺付近の海岸に流れ着いている。この楠が流れていった線は、まさに海の彼方の神が海岸に寄り着く神の道にあたっていたのである。ここでは流れる海藻が楠になっているのである。つまり、この光り輝きながら海上を流れる楠は、雷神が楠に宿るという山の信仰と、神が海上を流れるものにくっついて漂着するという海の信仰とが一つに融合した産物だったのである。そこから、楠は川ではなく、海上を流れることになったのである。

五

それならば、この異質と思われる二つの信仰を一つに融合せしめたものは何だったのであろうか。そこに紀伊国の海人部と大伴氏との二つの氏族を置いてみるとともに、そこから、先にあげた、この小話の終りが比蘇寺縁起譚の形態になっていることへの疑問を解いてみたい。

さて、日本霊異記下六をみると、吉野山の山寺にいた大僧が魚を食べたという話がある。この大僧が山中で修行中極度に衰弱したので魚を食べたいと思い、弟子に魚を買ってくるようにいう、そこで弟子は紀伊国の海浜に行き、新鮮な鰯八匹を買って帰ってくる、途中で会った三人の檀家の人々が変に思い、鰯を入れた小櫃を開けるように求める、弟子は拒むのだが、三人が無理に開けてみたら法華経八巻があった、これを聞いた大僧は法華経の加護と思い、その鰯を食べた、――ざっとこんな筋の話である。法華経霊験譚であるが、僧が魚を食べるというところに問題がある。いうまでもなく、生き物である魚を食べることは僧にとって固く禁じられている。だのに、僧、それも修行中の大僧が魚を食べたというのは、そこに法華経の霊験を語るという意図があるにしても矛盾している。後に付けた教訓で、「法の為に身を助くるに、食物に於きては、雑毒を食へども、甘露と成り、魚宍を食へども、犯罪にあらず、」といってはいるが、これとてもこじつけの感を免れないのである。

そこで、藤森賢一氏は、この話の下に先行の伝承があるのだろうと推測し、そこからこの矛盾を解いてゆこうとされた。藤森氏は、固有信仰では、人に食われるものが神であったとか、紀伊国の海人部にとって吉野川が聖なる川であったとか、というようなことを前提として、その先行の伝承を、

即ち、紀伊の国の海部にとっての聖なる川、紀の川の上流に、神を祀る聖域があり、一人の司祭者がいた。年老いて身心衰弱したので、使の者を紀州の海に遣し、海の幸をもたらして貰い、彼らの神である魚を食ってその不可思議な力をわが身に感染せしめ、一挙に変若った――というのである。[13]

と推測されているのはまことに興味深いものがある。この話の下にこうした伝承を置いてみれば、この矛盾は鮮やかに解けるのである。しかし、ここでは、そのことよりも、吉野川の上流に紀伊国の海人部の聖域があったということを借用してみたい。これは示唆に富む着想である。この大僧が修行していた山寺のあった山が海部が峯と「海部」という名を冠していることは、このことをそれとなく語っているといえよう。

ここで想起されるのは、壬申の乱の際、大海人皇子、後の天武天皇が吉野に隠れていたということである（天武即位前紀）。吉野が山深いところなので、隠れるのに都合がよかったということもいえるが、そこに海人部の聖域があったとすれば、この行動の意図はもっとよく理解できるのである。一体、大海人皇子は、その名の示す通りに、大海人氏が養育したものであるといわれている。[14]すれば、彼がことを起こすに当たって、わざわざ吉野へ行ったというのも、表面上はともかく、実際は、そこにある海人部の聖域に行き、海人部の神の加護を得ようとされたということだったのではないだろうか。これを現実的な面からいってみれば、その神の背後にある海人部の支援を期待したということになるだろう。単に隠れるというようなことではなかったのである。

その天武天皇が隠れた吉野というのも、一点に絞っておれば、吉野宮ということになる、すれば、この宮は或いはこの聖域の中心にあったのではないだろうか。その吉野宮は奈良県吉野郡吉野町宮滝の辺りとされている（大系本頭注）。すれば、比蘇寺のある奈良県吉野郡大淀町比曾（全集本頭注）とは、それ程離れているところではない。[15]ということは、この比曾の地も紀伊国の海人部の聖域の圏内にあったというふうには考えられないだろうか。つまり、紀伊

国の海人部の聖域の中に比蘇寺は建っていたということになるのである。そこで、大胆な推測をしてみれば、比蘇寺は或いは紀伊国の海人部の氏寺ではなかったかという気がするのである。なおいえば、下六のあの大僧が修行していた山寺というのも或いはこの寺であったともみられるのである。海部が峯という山にあったからである。

一体、この寺については、比蘇寺、比蘇山寺、吉野寺、現光寺、などさまざまな名称がある。しかし、関係史料にもっとも多くでてくるのは、比蘇寺である。[16] すれば、比蘇寺というのが原名ではなかったかと思われる。ただし、その寺地がやや山がかったところにあって、背後に山を負い、すぐ側に比蘇川が流れていて、一応固有信仰の聖地の型になっているので、もともとは神を祭っていた聖地ではなかったかと思われる。紀伊国の海人部たちはここに自分たちの神を祭っていたのである。それが後に仏教の聖地になって、そこに氏寺を建てたのであろう。すれば、比蘇山寺というのが一番の原名であったかもわからない。

ところで、古代紀伊国には海部郡という郡があった（和名抄）。現在の海草郡にあたり、吉野川の河口のすぐ南に位置している。郡名にわざわざ「海部」というのがついているのだから、この辺り一帯が海人部の一大基地であったとみなければならない。紀伊水道に面しているのだから、海を生活の場とする海人部にとっては恰好の地であったといえよう。中一、下二十五、二十九、三十二、と海部郡を舞台とした話が四例もあるということは、この地方の海人部の勢力を思わしめるものがある。すれば、紀伊国の海人部というのも、つまりは、この地方の海人部のことになるのである。だから、吉野川の上流に聖域を設定し、後に氏寺を建てたのは、その位置や勢力からして、この地方の海人部であったとみて置いてよいだろう。

六

それにしても、海を生活の場とする氏族が、山深いところに神の聖域をみたり、そこから流れる川を神の通る聖なる川と考えるというのは、どうもすっきりと納得できないところがある。氏族の性格に合わないのである。海の氏族ならば、それこそ、海中なり、海の彼方なりに聖域を置き、海上に神の道をみるという方がより自然な発想であろう。先にあげた記七四の歌にみられるように、由良海峡の海の中に聖域をみるというようなのが海の氏族には合っている。その由良海峡は海部郡のすぐ北にある。すれば、この歌は或いはこの海人部の伝承していたものであるかもわからないし、この歌の中に秘められた神観のようなものが、この氏族の本来のものであったともいえよう。いってみれば、その海中の聖域から神は海藻にくっついて海部郡の海岸に漂着するのである。漂着神の信仰こそ、海人部に似つかわしいのである。

ただ、ここで考えてみたいのは、吉野というところが持っている性格である。いうまでもなく、吉野は山深いところであり、森林地帯であった。良材の産地であった。一方、海人部は、舟を使って魚をとったり、輸送をしたりしているのだから、その舟を造る造船業にも従事していたとみなければならない。その舟を造るのには、播磨国風土記逸文にみられるように、楠のような大木が必要であった。吉野はそうした大木の産地であったのである。すれば、吉野は海部郡の海人部にとっては、生活の根源であったともいえる。こうしたところから、奥深い山中に聖域をみ、そこを流れる川を聖なる川とする、という山の信仰を受容し、吉野を彼等の聖域として認識するようなことになったのではあるまいか。

こうして、一旦山の信仰を受容することになると、そこからさらに楠に雷神が宿るという信仰をも取り入れることになったのであろう。そして、それには大伴氏との接触ということが一つの契機になっているように思われる。大部屋栖野古は「紀伊の国名草の郡の宇治の大伴連等が先祖」であったという。これによれば、名草郡に大伴氏がいたことになる。その名草郡は海部郡に隣接している。すれば、この地方の海人部と大伴氏との間に接触があったことは十分考えられる。ところで、その大伴氏の大和における本拠地は奈良盆地の中東部であったといわれる。[17] そこから吉野川の河口付近に進出してきたのであろう。大和からは下市か五条あたりにでて吉野川を下れば、この地へ来るのは容易だったのである。その奈良盆地の中東部は、日本霊異記上一の話や記紀の三輪山神話などにみられるように、雷神信仰の盛んなところであった。大伴氏はこの地方に進出するとともに、こうした雷神信仰をも持ち込んだとみられるのである。一方、海部郡の海人部は、すでに山の信仰を受容しているのであり、しかも、舟を造るのも雷神が宿るのも同じ楠であるところから、大伴氏と接触するとともに、この雷神信仰をも容易に取り入れたものと思われる。

こうした経過を経て、海の信仰と山の信仰とが融合し、雷神の宿る楠が海上を流れて海岸に寄り着くという、奇妙な伝承が生まれたのであろう。そして、その伝承者は海部郡の海人部だったのである。この伝承がさらに仏教的なものに変容して、その楠から光る仏像が作られるという話が生まれてきたのであろう。しかも、それはまことに神秘的で尊い話であるところから、海部郡の海人部が、自分たちの氏寺である比蘇寺の縁起譚としたのではあるまいか。一方、紀伊国の大伴氏であるが、自分たちの家伝を作るにあたって、当時の豪族たちの仏教傾斜の風潮に従って、仏教的なものを基調としてみようとしたのであろう。その際、たまたまこの地で接触した海人部が、神秘的で尊い寺の縁起譚を持っていたところから、これを借用し、それに仏教伝来時の話を巧に付け加え、しかも、その主人公を自分たちの先祖である屋栖野古にすり替え、家伝として仕上げたものとみられるのである。

大伴氏は、いうまでもなく、大和の豪族である。しかし、いくら豪族であるといっても、紀伊国の海岸地帯に来てみれば、その海岸地帯で勢力のある海人部の存在を無視することはできなかった筈である。従って、その縁起譚を借用し、家伝として転用するにしても、縁起譚の形態まで崩すことはできなかったのではあるまいか。こうして、家伝でありながらも、一番終りに、「今吉野の比蘇寺に安置きて光を放つ阿彌陀の像これなり。」という縁起譚としての句を残すことになったのであろう。つまりは、この海人部の勢力がなさしめたことだったのである。

なお、この小話では、その楠は高脚の浜あたりを流れていたことになっている。この話が、今述べたように、本来海部郡の海人部によって伝承されたものであるとすれば、その辺りの海、例えば、紀伊水道あたりを流れていたとあるのが穏当なところであろう。それがずっと北の高脚の浜あたりになっているところには、今少し考えてみなければならない問題がある。今は十分に考え得ないが、その一つの鍵になるのは、住吉を中心として、この付近一帯が海人部の一大基地であったということである。それは恐らくは瀬戸内海東部における最大の基地であったと思われる。その勢力は紀伊国の海人部のそれを遙かに上廻っていたとみられるのである。こうしたことから、本来は紀伊水道あたりを流れていた筈の楠が高脚の浜あたりを流れることになったのではあるまいか。海人部同士の力関係である。

しかし、それを紀伊国の大伴氏が借用するのであれば、元に戻して、紀伊水道あたりを流れていたとした方がよいのである。ここにもまた、海人部と同じように、大伴氏間の力関係が微妙に投影しているように思われる。万葉集に、

いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ（六三）

大伴の高師の浜の松が根を枕き寝れど家し偲はゆ（六四）

とあるように、この地方にも大伴氏が進出していたのである。[18] そして、その勢力は、その場所柄からして、紀伊国の大伴氏よりずっと強力であったとみなければなるまい。そのために、依然として高脚の浜あたりを流れることになっ

たのであろう。こうして、吉野の比蘇寺の仏像が、遠く離れた和泉国の高脚の浜あたりを流れていた楠によって造られるという、考えてみれば、まことに奇妙な構想になったのであろう。

何れにしても、この小話の一番の原話は紀伊国海部郡の海人部の伝承であり、それが比蘇寺の縁起譚になり、その海人部と大伴氏との接触から、大伴氏の家伝の中に取り入れられ、そして、いわれているように、もし景戒が大伴氏の出自とすれば、その景戒の手によって日本霊異記に持ち込まれたということになろう。ただし、これについては、景戒が大伴氏の出自であったかどうかは必ずしも明らかではないので、その理由はもう少し別のところにあったかもわからない。ともかく、ここに定着するまでには、複雑な径路を辿っているものとみられるのである。[19]

注（1）大伴氏出自説については、中野猛氏が、「これは上巻五話に『本記』として、紀伊国名草郡宇治の大伴連らの先祖である大部屋栖野古連公の伝を記載していること、下巻三十八話に長岡京における藤原種継暗殺事件を記載するが、『続日本紀』で犯人とする大伴継人の名を欠いている点が、大伴氏に同情的であるということ、その他、各説話の伝承者と目される人物には大伴氏に関係する人々が多いことなどをその理由としている。」と手際よくまとめて解説されている。なお、中野氏自身も、「大伴氏は日本全土に見られる氏であるから、景戒が大伴氏の出身であるとすると『霊異記』に見られるような全国的な説話も入手しやすい立場にあったことになるのかもしれない。」（全集本　一二頁　解説）と、この説に賛成していられるようである。

（2）なお、この賛について、渥美かおる博士は、本記の終部に添え書として記されていたものだとしていられる（日本霊異記における説話の形成過程―特に上巻第五縁をめぐって――「説林」第十七号十一頁）。この賛は他の賛に比べると長く、しかも、本記の中の(ハ)の部分での問答の解説があったりして、やや異なって居り、確かに問題があるように思われる。しかし、ここまでを本記の文章とするのは如何であろうか。さらに考えてみたい。

(3) 黒沢幸三博士　紀州大伴氏家伝の形成（「国語と国文学」第五十六巻第十一号）　八二頁
(4) 竹居明男氏は、この話には、造仏や仏像の霊異が語られていて、寺の創立については必ずしも語られていないところから、寺院縁起というよりも仏像縁起と称した方がよいとされている（「吉野寺縁起」の史料性をめぐって――欽明紀十四年五月戊辰朔条を中心に――「日本書紀研究　第十一冊」所収・六四頁）。厳密にいえば、確かにそのようにいわれるのだが、仏像や塔などは寺院の中心的な存在であり、それを抜きにしては寺院のことは考えられないので、広い意味では寺院縁起といって置いてもよいのではないだろうか。
(5) 引用文は全書本であるが、「吉野寺」を「吉野の寺」と訓読してある。吉野地方の寺ということになるのだが、ここは固有の寺名とした方がよい。よって引用文を改めた。
(6) 大林太良氏　神話の話（講談社学術文庫）　三〇頁
(7) 民俗学辞典　五二五頁　「卜占」の項目
(8) 満久崇麿氏によれば、古代では琴はキリやヒノキで作られていたとのことである（「木のはなし」一〇〇頁）。これらの伝承に誤りがあるのであろうか。しかし、仁徳記の話のように、楠で作った琴の音が七里に響く程素晴らしかったとあるのによれば、楠でも琴を作っていたのであろう。
(9) 谷川健一氏　神・人間・動物―伝承を生きる世界―　五一頁
(10) 山上伊豆母博士　神話の原像　一一八頁
(11) 記紀歌謡評釈　一七二頁
(12) 日本民俗事典　七三一頁　「和布刈神事」の項目
(13) 藤森賢一氏　魚を食う僧―霊異記下巻六縁考―（「密教文化」第一一三号）　七頁
(14) 三谷栄一博士　古事記と海人族の伝承―稗田阿礼をめぐって―（「国学院雑誌」第五十八巻第八号）　一〇頁
(15) 安井良三氏は、比蘇寺と吉野宮とが同一地区にあったのではなかろうかと推定されている（古代寺院と氏「日本書紀研究第五冊」所収・二五一頁）。

(16) 竹居明男氏　前掲論文　五二頁

(17) 岸俊男博士　日本古代政治史研究　八〇頁

(18) 上田正昭博士は大伴氏の本貫を摂津・河内地方とし、「『万葉集』に大伴御津浜・大伴高師浜の地名が記され、この地方に『雄伴郡』(『摂津国風土記』逸文)・『雄伴郷』(『和名抄』)などがあるのも不思議ではない。」(「日本古代国家論究」一二九頁)とされている。従って、上田博士によれば大伴氏は、この地方から海岸線を紀伊国に南下したことになろう。

(19) (ロ)、(ハ)、および話全体の構想などについては稿を改めて述べてみたい。